

古川叢書



清水 文雄

衣通姫の流

古川書房

古川
叢書



清水 文雄

衣通姫の流

古川
書房

しみず ふみ お
清水文雄

明治36年（1903）熊本県に生まれる

昭和7年（1932）広島文理科大学国語文学科卒業

略歴 成城高等学校・学習院・広島師範学校・広島大学各教授を経て、
現在比治山女子短期大学教授

著書 女流日記・王朝女流文学史・和泉式部日記（岩波文庫）和泉式部
歌集（同）・河の音（随想集）など

現住所 広島市高陽町下深川654-1

衣通姫の流

〔古川叢書〕

1978年9月25日 初版発行

¥1,300

著者 清水文雄

発行者 古川篤夫

発行所 古川書房

〒145 東京都大田区上池台4-29-3

電話・東京（729）2556

振替番号・東京 5-45774番

©1978

印刷・苅部印刷(株) 製本・東雲堂

（落丁・乱丁本はお取り替えます）

3395-0219-7444

目次

衣通姫の流	一
源氏物語の男性論	二五
「もののあはれをしる」ということ	四三
をかし	六七
はづ・はぢ・はづかし	八七
「つれづれ」の源流	一〇
「あとなし」と「はかなし」	一四一
「はかなし」について	一五五
「世を知る」ということ	一七四

和泉式部ノート	二〇三
文学的感想	二〇四
岩つつじの歌	二〇九
うきもあはれと	二二四
和泉式部集校訂余滴	二三五
男と女	二三〇
中古文学の愛	二三四
あとがき	二四三
収録論文等初出一覧	二四四

衣通姫の流

はじめに

をののこまちは、いにしへのそとほりひめの流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よきをうなの、なやめるところあるにいたり。つよからぬは、をうなのうたなればなるべし。^(注1)

紀貫之は、古今和歌集仮名序で、「ちかき世に、その名きこえたる人」として、後に六歌仙と呼ばれるようになった六人、すなわち、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・宇治山の僧喜撰・小野小町・大伴黒主の名を順次あげ、その歌風にいちいち適切な短評を加えている。冒頭に掲げた一文は、そのなかの一人、小野小町についてなされた評語である。

小野小町を王朝女流文学史の初頭に位置づけることは、すでに大方の容認するところとなっているかと思うが、私も同じ史観に立つものである。この立場から、かつて王朝女流文学の歴史を略述した

(注²)

こともある。その小町の歌人としての系譜が、さきの一文に、「いにしへのそとほりひめの流なり」と規定されているのであるが、その根拠について、貫之はいっさい説明の言を費していない。しかし、この「をののこまちは云々」には、どこか凜とした断定の響きがある。それは、この断定が、なみなみならぬ見識に支えられていることを物語るものと見なければならぬ。私は、貫之のこのような断定を、日本文学の歴史にかかわる重大な発言と受け取っている。ここでは、そのことにふれて、小野小町が「衣通姫の流」といわれるゆえんを、少し考えてみたいと思う。

一

小野小町は、父祖・生没年をはじめとして、その履歴は、ほとんど明らかにすることができないのが実情である。一方、小町をめぐる美人伝説・好色伝説・歌人伝説などの、いわゆる小町伝説は、平安時代末期以後広汎な流布を見たが、前田善子氏は、その源流がはやく伊勢物語に見られるとし、片桐洋一氏も、小町伝説の生成が、すでに後撰集や大和物語の時代に看取されるとしている。^(注⁴)このような小町伝説の発生と源流、展開の具体的様相については、前田氏がさきの書において詳述するところである。前田氏は、小町が平安末期以来伝説の主人公として喧伝されるようになり、その事蹟の信ずべきものが絶無であるのに反し、伝説的記録は枚挙にいとまがないとし、小町がこのようなおびただ

しい伝説の主人公となるための本質的な条件として、つぎの二つをあげている。第一は、小町の伝記そのものが未詳であることであり、第二は、その人となりが世人の興味と関心に値する特徴を具有していたことであるとする。とりわけ、後者において、小町はすぐれた歌人であるうえに、美人薄倖の一生を終えた人と推定されるなど、種々の伝説を生むのにもっとも有効な条件をそなえていたといっている。この二つの条件が相まって、はじめて伝説としての生命が発生するという前田氏の意見は、後の和泉式部にも当てはまることであるが、妥当性をもつものとせねばならない。

小町の生涯は、このように伝説の深い霧につつまれ、その人生の映像は朦朧としているが、そうかといって、前田氏のように、その事蹟の信すべきものが「絶無」であると言い切ることは、正しくないであろう。それは、小町から安倍清行・小野貞樹・文屋康秀に贈られた歌が、古今集の恋二（五五七）・恋五（七八二）・雑下（九三八）に、それぞれ一首ずつ収載されており、それらの詞書と歌によって、小町の人生の断片のいくつかをとらえることができるからである。これらの断片にかかわりをもつ清行・貞樹・康秀、前田氏が前記書でこの三人の伝記を考証するに際して引用された諸文献を参照すれば、小町の生存年代も、おおよその見当がつく。すなわち、それが仁明・文徳・清和の三代にわたっていたことは、ほぼまちがいないものと思われるのである。

このほか、僧正遍昭との間に詠み交された有名な贈答歌が、後撰集（雑三）・小町集に見える。小町が大和石上寺に詣でたとき、たまたま同じ寺に滞在していた遍昭との間に諧謔の歌を取り交すので

あるが、片桐氏の前記論文によれば、その遍昭が、後撰集の別の伝本には「真性法師」「深照法師」などとなったものもあり、異本小町集では「そせい法師」となっている。また、小町の詣でた「石上寺」が、同じ贈答歌を収録する大和物語（第百六十八段）では「清水」、同じく遍昭集（西本願寺本）では「長谷」となっている。このように、小町の対詠相手の名とその詣でた寺の名とにおびたらしい異伝が見られることは、説話的要素を多く含む持つ大和物語、ならびにその影響のもとに成ったと思われる現存遍昭集は論外として、後撰集・小町集にもすでに小町伝説化の現象の存することを物語るのであるとする片桐氏の見解に従って、この両集も小町の伝記をたどるための資料からは、一応外しておくのがよいであろう。また、伊勢物語は、第二十五段ほか数段にわたって、小町の面影をしのばせるような女が登場して、在原業平らしい男と交渉をもつが、その女をただちに小町と断定することはできない。しかし、遍昭・業平の二人との関係は、さきの三人とのそれに比して、いっそう深いものがあつたと推測されるが、今はその問題に深入りすることをひかえたい。

小野小町について考えるにあたり、もっとも多くの示唆を与えられたのは、秋山虔氏の「小野小町（注5）的なもの」であつた。秋山氏はその冒頭において、氏がすすめようとする小町論の方法について、つぎのように説明している。すなわち、小町伝の構築が至難である実情から、研究対象は必然的に小町の詠歌活動に限定されざるを得ないわけであるが、その場合、資料としてまず脳裡に浮かんでくるのは小町家集である、ところが、小野小町集は純粹に小町の歌を収録したものでないことが、すでに

諸家によって明らかにされている現在、「小町文学の研究資料として信頼するに足るのは勅撰歌集に収録された小町作歌」ということになるが、古今集ほか勅撰集に収録された小町歌計六十四首のうち、新古今集以下の諸集は、小町家集を資料としていると考えられるので除外するとして、残るのは古今集の十七首と後撰集の四首である、しかし、後者に入る小町歌には信をおきたい点があるので（清水云、その理由については後に述べられているが、ここでは取り上げない）、必然的に、小町論は古今集所収の小町歌のみを考察の対象とすることになる、ただ、それらの歌は詞書を欠き、作歌事情が不明であるところから、自然、方法として歌の形象の分析により論をすすめるほかに、小野小町の「人と文学」ではなく「小野小町的なもの」と題した理由がここにある、——大要このように述べている。

秋山氏の小町論の方法についての周到な用意のうかがえる説明を、やや詳しく紹介したのは、私の小町論も、基本的には、秋山氏が考えていられるような方法によらざるを得ないと思ったからである。というよりも、ここでやや逆説めく言い方をすれば、小町の「人生」からも、作歌事情を語る「詞書」からも自由になった「歌」そのものと対面せざるを得ないというのは、作品としての「歌」の形象の分析に終始するという、作品研究の本来の姿を取りもどす幸運を恵まれたことを意味する。

「作品の自己充足性の乏しさ」をあくまでも「作品の欠陥」と認めようとする立場に立って、文学批評のあるべき姿を求めた、山本健吉氏のかつての提言を思い起す。^(注6) 小町の歌は、そういう詩学の方法

の純粹な適用をわれわれに要求している。いいかえれば、小町の「人生」の「歌」への移調が、作品としての「自己充足性」を完璧なものとしていることになる。そのことは、小町の文学の特質をもおのずからに語っているばかりでなく、ぎゃくに、みずからあらわに語ることを極力拒んだ小町の痛切な人生が、そこに諷示されていると見ることもできる。さらにまた、そういう目に見えぬ「人生」の重みが、その「歌」の完璧性を保証しているということもできようか。小町の文学の限らない魅力の秘密も、この辺にあるのであろう。

二

冒頭に掲げた貫之の小町評の一文に、「いにしへのそとほりひめの流なり」とあるのは、小町の歌人としての系譜の規定であるといったが、「あはれなるやうにて」以下は、その歌風を論評したものである。この記述の形式は、他の五人の男性歌人のそれといささか趣を異にしている。たとえば、業平については、

ありはらのなりひらは、その心あまりて、ことばたらず。しばめる花のいろなくて、にほひのこれるがごとし。

と述べられているが、これを基準として、小町評の記述を見ると、はじめの「いにしへのそとほりひめの流なり」と、末尾の「つよからぬはをうなのうたなればなるべし」とが、一見余分の感を与えるのはたしかである。賀茂真淵もこのような印象を受けたものと見えて、古今和歌集打聴では、前者については「後のしわざ也」、後者については「注にて文にあらず」として、一つとも削除している。したがって、小町評は他の男性歌人なみに、「をののこまちは、あはれなるやうにて、つよからず、いはゞ、よきをうなの、なやめる所あるにゝたり」という表現をとってくる。香川景樹も古今和歌集正義で、後者については、真淵の説を否定し、「みたりに注となしてすつへきにあらす」としてそのままにしているが、前者については、真淵よりも強い語調で、「ことわりなき事にて疑ひなき誤入なれば取すつへし」としている。

この箇所に対応する真名序の記述は、「小野小町之哥。古衣通姫之流也。然艶而無_二氣力_一。如_三病婦_二之着_一花粉」となっている。仮名序の「いにしへのそとほりひめの流なり」は、真名序でも「古衣通姫之流也」となって両者が一致しているが、前者の「つよからぬは、をうなのうたなればなるべし」に対応するものは、後者にはまったく欠けている。両序の先後関係については、説のあるところであるが、どちらも、撰者の和歌に対する見解を述べた点では一致しているとしても、和文・漢文という文体のうへの相違ばかりでなく、重要な点で多くの異同が見られる。したがって、仮名序の「つよから

ぬは云々」の一文に対応するものが真名序に見えないからといって、前者が後人の補入であるとする理由にはならない。仮名序の小野小町評の表現は、本来このままの形をそなえていたものと考えなければならぬ。真淵や景樹の処置は、その点からいっても誤りとせねばならないが、一般的にいつても、古典の本文に対するこのような態度には賛成することができない。

筆者としては、仮名序を紀貫之、真名序を紀淑望とする説が古来行われているが、なお問題がないわけではない。しかし、少なくとも仮名序については、種々の点から見て、中心撰者である紀貫之の手になるものと考えるのが、もっとも自然である。以下、その立場に立って考察をすすめてゆくことにしたい。

さて、仮名序の小町評が、さきに掲げた形のままであるとして、改めてその表現を凝視するとき、末尾の「つよからぬは云々」は、小町が六歌仙のなかのただ一人の女流歌人であることを念頭においての記述と見えないこともないが、歌人の系譜の規定から始められているところは、同じ理由だけでは説明がつかない。もっと重要な文学史上の事実が指摘されているのではないかと思われる。このことについて、貫之はなにらの説明も加えていないことはさきにもいったが、いったい、「いにしへのそとほりひめの流なり」という断定は、いかなる文学史的事実の認識に立ってなされたものであろうか。そのことを知るためには、小町自身の歌を吟味してみなければならないが、その前に、衣通姫の事蹟にふれておく必要がある。

三

衣通姫は、日本書紀(注7)によると、允恭天皇の皇后の妹で、弟姫おとひめといった。天皇の七年十二月一日、新

宮造成の祝宴が設けられ、そのあとで、天皇の琴に合せて舞を奉納された皇后は、当時の風俗に従って、「娘子奉る」と礼事を申された。「奉る娘子は誰ぞ。姓字を知らむと欲ふ」との仰せ言により、

皇后は、「已むこと獲ず」して、「妾が弟、名は弟姫」と答えられた。その弟姫について、書紀には、「容姿絶妙かはすぐれて比無かならひし。其の艶うるはしき色、衣より徹りて見れり。是を以て、時人、号けて、衣通郎姫

と曰まをす」と述べられている。この「そとほしのいらつめ」が、後に「そとほりひめ」と呼ばれるようになったのであろう。翌日、天皇は、その母に随って近江の坂田にあった姫のもとへ、お召しの使者

を遣わされたが、姫は、皇后の心を憚ってあえて参向しようとしなない。重ねて七度も使者が立ったが、なおも固辞しつづけるのであった。そこで天皇は、改めて舍人烏賊津使主いかづつおみを使者に立てられた。

これを迎えた姫は、「豈、天皇の命を懼りまをさざらむや。唯皇后の志を傷らむことを欲はざらくのみ。妾、身亡ぬと雖も、参赴まうでじ」と、衷情を訴えて拒絶したが、けっきょく烏賊津使主

の按じ出した奇略によって、上京する仕儀となつてしまった。しかし天皇は、皇后の怒りを怖れて、

宮廷(古事記によれば遠飛鳥宮)に近づけず、藤原に別の殿屋とのを設けて、そこに住まされることにな

った。天皇が、あたかも皇后の皇子出産の夜、はじめて藤原の宮に出かけられたとき、これを知った皇后は、産屋を焼いて焼死するとまでいって、天皇をおどろかされたという。

翌八年二月のある夕ぐれどき、天皇が藤原の宮におでましになり、ひそかに姫の様子をうかがわれると、姫は独り端近にいて、天皇を恋い待つ趣であったが、すでにおでましになっているとも知らず、ふとこんな歌を口ずさむのであった。

我が夫子が来べき夕なりささがねの蜘蛛の行ひ是夕著しも

「ささがねの」は、蜘蛛の枕詞の「ささがにの」の古形といわれるが、笹の根の、の意であるとする説もある。同じ歌が、古今集の墨滅歌すみけりうたのなかにも入っており、仮名序の小町評のあとに注記された証歌のなかにも見えるが、ともに第三句以下が、「ささがにのくものふるまひかねてしるしも」となっている。蜘蛛の行動が目立つのは、待ち人の来る予兆であるとする民間信仰が、この歌の発想の拠り所となっている。古今集の伝える本文は、書紀のそれを改変したものと推測されるが、歌としては、書紀に見えるものの方がすぐれている。「是夕」を「かねて」と改めたのは、おそらく、「よひ」の重複を嫌ったものであろうが、「夕」「是夕」と、念を押すようにくり返したのは、「我が夫子」の来訪の予兆をもう一度わが心に確かめ、待つ恋の思いをいっそう切なくする気味が感じられる。「か

ねて」は民間信仰にとらわれて、理に落ちる過誤を犯したものと見られようか。また、自己顯示的な行動を意味する「ふるまひ」よりも、蜘蛛の習性に従ったおのずからな動きを意味する「行ひ」の方がすぐれており、「夕」のくり返しと合わせて、この歌における詩の完璧性を保証するものとなっている。

ともあれ、この歌には、待ちわびた思いが、蜘蛛のうごきに託して、いかにも素直にうたいあげられている。天皇は感に堪えず、

ささらがた錦の紐を解き放きけて数あまたは寝あまたずに唯ひとよ一夜のみ

翌朝、井の傍の桜の華を見て、また、

花ぐはし桜めの愛こで同愛こでは早くは愛めでず我が愛めづる子ら

と、格調高い愛の歌が、姫の歌に誘われるように、相ついで詠まれる。

皇后の恨みがいよいよ募るにつけ、姫は奏上して、つぎのようにいう。

妾^{やつこ}、常に王宮^{おほみや}に近^{ちか}きて、昼夜^{ひるよる}相^{あひつ}續^つぎて、陛下^{きみ}の威儀^{みよそはひ}を視^みむと欲^ほふ。然^されども皇后^{きさき}は、妾^{やつこ}が姉^{いへ}なり。妾^{やつこ}に因^よりて恒^{つね}に陛下^{きみ}を恨^{にく}みたまふ。亦^{また}妾^{やつこ}が為^{ため}に苦^{くる}しびたまふ。是^{こゝ}を以^もて、冀^{ねが}はくは、王宮^{おほみや}を離^{はな}れて、遠^{はる}く居^いらむと欲^ほふ。若^もし皇后^{きさき}の嫉^{ねた}みたまふ意^{みこころ}、少^{すこ}しく息^{やす}まむか。

天皇は、姫の情理をつくした提言を容れて、河内の茅渚^{ちの}に宮を建て、姫をそこに住まわせることになった。十一年三月一日、天皇は久々にこの宮に行幸されたが、姫はいよいよ遠のいたおでましを得た喜びを、つぎのようにならう。

とこしへに君もあへやもいさなとり海^{うみ}の浜藻^{はまも}の寄る時^{とき}を

書紀の記述によつて、允恭天皇と衣通郎姫の悲恋物語の経緯をたどると、大体以上のようになる。この箇所は、四首の歌を核とする歌物語の形態をそなえているが、その表象にやや詳しくふれてきたのは、「衣通姫的なもの」の性格を、できるだけ正確にとらえておきたいと思つたからである。

さて、「衣通姫的なもの」を規定する最大の条件は、天皇と姫との仲の隔絶ということである。天皇と姫との愛は、当初から皇后の嫉妬という障害をかかえ込んでいた。姫が、度重なる天皇の要請に応じようとしなかったのは、そのことを知っていたからである。参向を決意したのは、たまたま烏賊